海軍上等飛行兵の秋

koberyo1

（私が以前、書いた旧大日本帝国海軍に入隊した記録、『入隊の日』のつづきになります。パブーに前編ともなる『入隊の日』をアップしておりますので、併せてご覧いただければ幸いです）

「光陰矢のごとし」と言うが、月日の経つのは早いもので7月10日に入隊して夢中で取り組んできた。昭和19年10月10日で階級章が二本から三本になって上等飛行兵に進級した。 三カ月は本当にあっという間で、毎日が楽しくなって余裕もでてきて、海軍の敬礼も上手になった。

海軍生活の中で罰直の種類はいろいろあった。大きく考えればしごきであり、私的制裁としか言いようのないものもあった。個人で受ける場合よりも、どちらかと言えば、連帯責任の養生するため、その班全員が受けることが主であった。握りこぶしで殴られるのが普通である。

10月に入ってからアメリカの空襲が激しさを増し、警報が鳴るつど、待避をするので眠りを妨害される時がしばしばあった。 それはたしか10月中旬頃のことであったかと思う。昼の課業が厳しい日に、疲労が重なり、警報を聞き取れず、私は吊り床（ハンモック）の中にいた。すなわち吊り床で寝ていたのである。

吊り床をゆさぶる人がいるので誰かと見て驚いた。甲板の下士官や教育係の上長ではなく、「中尉」の襟章で氏名不詳の上官である。

「貴様、空襲警報退避の指示が聞こえないのか」と怒鳴られ、吊り床から引きずり落とされた。内心自分がこれは大変なことをしてしまったと思った。とにかく隣の吊り床は空で、待避した後であることが理解した。

「前に出ろ」との命令で一歩足を踏み出した瞬間、「中尉」の青竹のいっぱつめがきた。これはいつもの海軍精神注入棒とは違う針を刺す痛さであったが、こらえた。それがふた振り目で私はその場に倒れ、うめき声を上げた。 「中尉」をにらみつけて倒れたのである。さらに「立て」と言う。事業服を着用して「待避せよ」との指示。しかし立つことができず、 五分くらいの時間と思うが、自分が感じた時間は長かった。

痛さにあえぎながら私は「中尉」を睨み付けていた。 びっこで足が前に進まず、フラフラしながら待避所に向かった。待避所は自分たちで掘った防空壕である。待避所ではみんなが待っていた。 「遅かったな」とか「どうした、どうした」と三人が口を揃えていった。
「中尉」に「やられた」と言った。 「そうか、お前もか」という声が返ってきた。
「中尉」は警報が鳴るたび、制裁の相手を求めてわざと各部隊を見回っており、私のような獲

物を見つけては青竹を思う存分、ふるっていたのである。

　青竹は「しなり」と「かえり」があるので、普通の「海軍精神注入棒」の樫の木の棒とは痛さは異なる。樫の木の金剛棒は、じつは痛くないのである。

　数日のあいだ、びっこをひきながらの歩行が続いた。厠（便所）では、腰を落とすとき、ひどく痛いため時間がかかったし、そのたび、うなり声を発した。

　その「中尉」を、その後姿を見ることはなかったが、生涯「中尉」の顔は記憶して忘れることはないと思う。

　甲飛生は一般の兵種とは異なり、特別に進級が早かったので、私怨とも思われる屈辱的な私的制裁を受けることがあると聞いていたが、この青竹がその制裁かと思ったりした。

　とういのも将校が兵隊を制裁することは異例の処置であり、まずないことであった。すなわち、制裁に名を借りた私怨を晴らさんがための暴力的な「いじめ」であり、比較的リベラルといわれていた海軍であっても、このような愚劣極まりないことが戦時中は平気で罷り通っていたのである。

　そしていま――。秋も深まり、満天の星をいだく空に冷たい月が黄色く、やたらに大きく見えるこのような宵に、もの想いに耽ることがある。それは青春時代の回想だ。静かに青春を顧みる時、虚しさと悲しさのみが甦りくる、そんな瞬間がある。

　思うのは母のことである。特に青竹の痛みのときは、少年時代の私は母を偲んで声をこらえて、さめざめと泣いたのである。過去の私は「これが俺の青春の1ページなのか」と思い、そして辛いことがあっても「青春は永遠なんだから」と自分に言い聞かせた。

　兵舎の窓から仰いだ久里浜の月の素晴らしさを永遠に忘れまいと誓い、時を隔てて、今こうして握り締めた鉛筆を走らせ、原稿に向かっている。そうしていると、むかしの記憶が鮮明に甦ってくる。
　たしかに在りし日の思い出がクリアになるほどに、人の意識は時間の旅をし、遠い過去が昨日のようでもある。青春、なかんずく人生もまた永遠なのだと気づかせてくれるのである。

　尚、この体験は、昭和19年10月中旬頃のものである。